

武蔵野幕屋 聖書講筵

イエスの印

――ガラテヤ書第6章――

1957年3月31日

小池辰雄

御霊の人たち キリストの律法 有るかの如く思う 自分の荷を負って神の前に 善をなすことが楽しみ 第二の自然性 天的法則によって律法を満たす 十字架のほかに誇る所あらざれ 無即無限の世界が展開 第二の創造 BELIEVE・LIVE・LOVE キリストが罪を引き受けた 聖名のため受けし傷跡持たずして 十字架という徴 信とは根源の行為

【ガラテヤ6】

1 兄弟よ、もし人の罪を認むることあらば、御霊に感じたる者、柔和なる心をもて之を正すべし、且おのおの自ら省みよ、恐らくは己も誘わるる事あらん。2 なんじら互いに重きを負え、而してキリストの律法を全うせよ。3 人もし有ること無くして自ら有りとせば、是みずから欺くなり。4 各自おのが行為を驗し見よ、さらば誇るところは、他にあらで、ただ己にあらん。5 各自おのが荷を負うべければなり。

6 御言を教えらるる人は教うる人と凡ての善き物を共にせよ。7 自ら欺くな、神は侮るべき者にあらず、人の播く所は、その刈る所とならん。8 己が肉のために播く者は肉によりて滅亡を刈とり、御霊のために播く者は御霊によりて永遠の生命を刈とりとらん。9 われら善をなすに倦まざれ、もし撓まずば、時いたりて刈り取るべし。10 この故に機に随いて、凡ての人、殊に信仰の家族に善をおこなえ。

11 視よ、われ手ずから如何に大なる文字にて汝らに書き贈るかを。12 凡そ肉において美しき外觀をなさんと欲する者は、汝らに割礼を強う。これ唯キリストの十字架の故によりて責められざらん為のみ。13 そは割礼をうくる者すら自ら律法を守らず、而も汝らに割礼をうけしめんと欲するは、汝らの肉につきて誇らんが為なり。14 然れど我には我らの主イエス・キリストの十字架のほかに誇る所あらざれ。之によりて世は我に対して十字架につけられたり、わが世に対するも亦然り。15 それ割礼を受くるも受けぬも、共に数うるに足らず、ただ貴きは新に造らるる事なり。16 此の法に循いて歩む凡ての者の上に、神のイスラエルの上に、平安と憐憫あれ。



17 今よりのち誰も我を煩わすな、我はイエスの印を身に佩^おびたるなり。
18 兄弟よ、願くは我らの主イエス・キリストの恩恵^{めぐみ}、なんじらの霊とともに在らんことを、アアメン。

●御霊の人たち

ガラテヤ書の最後、第6章です。

「兄弟よ、もし人の罪を認むることあらば、御霊に感じたる者、柔和なる心をもて之を正すべし、且おのおの自ら省みよ、恐らくは己も誘^おわるる事あらん。」

「兄弟よ」、これは勿論、複数でありまして、「兄弟たちよ」です。

「もし人の罪を認むることあらば」

というのは訳が少し弱いので、

「もし人が何か罪に追いつかれたならば」

というので、罪に追いかけて、罪というものに追いつかれるというような、そういった言い方です。あるいは、

「罪に追いつかれて、捕えられるようなことがあったならば」

です。この「罪」は「パラプトーマティ」という字ですが、深刻な罪でなくて、なにか「あやまち」といったような、むしろ軽い気持です。「ハマルティヤ」「罪」という深い言葉ではない。だから、「科^{とが}」くらいでもいい。あるいは「あやまち」でもいい。サタンの誘惑か、なにかに捕まえられて、あやまちを犯すこと。それが

「科^{とが}に追いつかれるようなことがあったならば」

ということ。

「御霊に感じたる者」

というのはむしろ、

「御霊の人、御霊に属する者」

と訳している。「ホイ・プニユーマティコイ」は「御霊の人たち」という意味ですから。

「御霊の人たちは柔和な心をもつて」

マタイ伝に出てくるあの「柔和」と同じで、柔和な心でそのことを正してやりなさいと。

「かつ、おのおの自ら省みよ」

むしろ、御霊の人は、ひよつとすると非常に観察が、ある意味において、鋭いことになっていきますから、下手すると、人を審く。これはいけない。御霊で潔められた人は、罪、科^{とが}、過^{あやま}ちというのが見える。それでもつてすぐに人を審いてはいかん。柔らかい気持でもつてむしろ過^{あやま}ちを覆^{おほ}つて、そして、「こうじゃないか」ということで、それを正してやりなさいと。下手すると、いわゆる立派な信者という人がそうでない人を見下したり、審いたりする。



これはとんでもない間違いである。それは「おのおの自ら省みよ」と。自分を省みて、

「恐らくは己も誘われる事あらん」

と。そんな罪、科^{とが}の誘惑にかからないとは限らないから、自分も同じことになりはしないかと思つて、むしろ自分をよく省みなさいと、そういった事態を懇^{ねん}ろに語っているわけです。パリサイ的なクリスチャンに対する誠めです。かえつて、それくらいのものですね。マタイ伝の7章に、

「³何ゆえ兄弟の目にある塵を見て、おのが目にある梁木^{うつつばり}を認めぬか。⁴視よ、おのが目に梁木のあるに、いかで兄弟にむかいて、汝の目より塵^{ちり}をとり除かせよと言ひ得んや。⁵偽善者よ、まず己^{おの}が目より梁木をとり除け、さらば明かに見えて、兄弟の目より塵を取りのぞき得ん。」(マタイ7・3-5)

人の目の塵が見えても、自分の目の梁木^{うつつばり}が、下手すると見えなくなる。自分の目の梁木^{うつつばり}というのは、自分の義^{ただ}というものを私^{わたくし}したならば、私された義^{ただ}というものが梁木^{うつつばり}です。これは己^{おの}が義^{ただ}、この「己^{おの}が」というやつがいけない。これはキリストの義^{ただ}でなくては。人の目の塵が見える、ちよつとした欠点や、躓^{つまず}きが見える。それをとやかくと批判する。それはかえつて、自分が義^{ただ}しいと思つたその義^{ただ}しさが、かえつて大きなゴミなので、その義^{ただ}しさがかえつて大きな梁木^{うつつばり}であると。キリストはかくの如き者をパリサイ人、偽善者と言つた。それが即ち、

「おのおの自ら省みよ、恐らくは己^{おのれ}も誘われる事あらん」

という。

「^{あやま}過ちを人が犯して、その過^{おちい}ちに陥^{おちい}らないという、陥^{おちい}る可能性のない人はない」

と、アウグスティヌスが言っていますが、その通りです。

●キリストの律法

²なんじら互いに重きを負え、而^{しか}してキリストの律法を全うせよ。

「互いに重きを負え」

人の重荷を負つてやれと。とにかく、自分が軽いものを荷^{にな}いたいのが人間の生まれつきの人情、本能です。ちよつとしたことをやるのでも、すぐ骨惜しみをします。骨惜しみをして、家庭においても、学校においても、何処^{どこ}においてもそんな調子です。かえつて黙々として自分が先に立つて、実行をもつてそれを担^かつていく。それが「互いに重きを負え」ということ。この「重き」は、ある場合には罪であるかもしれない。人の罪を負うという、その「重き」の最大なものは、キリストが我々の罪を負つた。その「重きを負え」です。

「^{おきて}しかしてキリストの律法を全うせよ」

「キリストの律法^{おきて}」というのは面白い表現で、ガラテヤの諸教会の人たちが福音を聴きながら、モーセの律法にまた新しく捕えられてしまった。そして、「福音+誠律」「信仰+行為」とい



うことになって、律法的な行為ということに、そういった律法に囚われているから、パウロはここで逆に使って、「キリストの律法」と言った。即ち、モーセの律法でなくて、キリストの律法です。これはもし律法というならば、モーセの律法よりもっと深刻な律法です。マタイ伝の山上の垂訓、5章から7章に出ているところのあの山上の垂訓は、モーセの十誡以上に深刻である。

「殺す^{なか}勿れとあるけれども、人を憎むことは即ち殺したのである」

とキリストは言った。即ち、外的行為よりもっと人間の心の中の行為、心の姿において、キリストは罪を指摘しましたから、その点では、キリストというのはとうていモーセの律法どころじゃない。実はこれはモーセの律法の根本精神なんですから。

「キリストの律法を全うせよ」

というのを、そういった角度からだத்தட்டたのでは、これは誰も全うできない。キリストはモーセの律法にもうひとつ輪をかけた律法を新しく与えたのでは、いよいよもって誰か絶え得んやですね。けれども、キリストの律法は、一言をもつていうならば、これは愛ということです。キリストの律法は即ち、

「愛を全うせよ」

ということ。けれども、「愛を全うせよ」というこのパウロの言葉がもし命令であるならば、また誰かこれに絶え得んやです。本当に人を愛し得る人は一人もない。みな自己を愛するところの者は、即ち人間は「罪」というのですから。「人を愛する」ことは現象的には、一応はあることはあるでしょう。けれども、それは根本的ではない。根本的には、人間は自己愛である。自己愛は即ち罪である。その正反對の、

「心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くし、能力^{ちから}を尽くして、主たる汝の神

を愛せよ。また、その隣人^{となりびと}を愛せよ」

ということとは、

「己を憎まずしては、我が名のため福音のために己を憎まないでは、我が弟子

となることができない」

即ち、「愛する」ということは、「自己を憎む」ということと同じなので、自己を愛するとうことと「他人を愛する」ということが並行するわけにいかない。

「己を愛する如く、その隣人を愛せよ」

というのは、「己を愛する」というその愛し方が如何に人間に根源的なものであるか。そいつを引っくり返して、そして、「他を愛せよ」というんですから、これは生まれつきの我々には不可能のことで、不可能をキリストは要求しているんです。

「その愛を全うせよ」

と。然らばこの意味はどういうことであるか。それはもう少しあとへ行ってからまとめてお話します。



●有るかの如く思う

3 人もし有ること無くして自ら有りとせば、^{みずか}是みずから欺くなり。

原語をもう少し忠実に訳すと、

「何者でもないのに、何者であるかと自ら思うならば、それは自ら欺くものである」

何者でもないのに、自ら何かであると思う。我々は、実は何者でもない。実は、何者でもないということを本当に自覚すれば、これは素晴らしいことです。自分たちが何者でもないという、無的な存在であるはずの「無者」なんです。ところが、「無」を「有」に置き換えている。これは本当の「有」ではない、私たちは。

即ち、愛があるかという、愛がない。愛があるかの如くなる。実は、愛がないということにむしろ自分が徹底的に自覚すればいい。

「律法は行えない、とにかく自分はゼロである、いやマイナスである」

といったようなことを自覚しないで、みんな、有るかの如く思っている。「アズ・イフ」(as is)です。みんなこれ「アズ・イフ」の存在ですよ、私たちは。何者かであると思う。「サムシング」(something)であると思うことが、実は癌なんです。

「これは自ら欺くなり」^{あざむ}

と。それは虚栄心である。要するにこれはみんな虚栄なんで、「虚しき栄え」^{むな}を求めているんです、みんな。この日本語の「虚栄」という言葉が表わしているとおり、虚しき栄えを求めている。みんな虚栄であり高慢である。

「虚栄、高慢、これが罪の最大なるものである」

と、マルチン・ルターも言っています。この虚栄、高慢というやつは、サタンが持つ。サタンの性格は虚栄にして高慢、そして偽り、虚偽である。

「サタンは虚偽の父である」^{いつわり}

とヨハネ伝の7章にキリストが言っている。

●自分の荷を負って神の前に

4 各自おのが行為^{おのおの おこない}を^{ため}験し見よ、さらば誇るところは、他にあらで、ただ己にあらん。5 各自おのが荷を負うべければなり。

この言葉はなんかちよつとわからないですね、わかりにくいところです。

「各自おのが行為^{おのおの おこない}を^{ため}験してみてごらんさい」

と。この言い方は、コリント後書13章の5節に、

「⁵なんじら信仰に居るや否や、みずから^{ため}試み自ら^{ため}験し見よ。

とある。この「験し」「ドキマゾー」という字は、試金石やなにかで金属を験するという字です。「試み」は英語でいうと「テムプト」(tempt)、「験す」は「ブルーヴ」(prove)です。



汝らみずから知らざらんや、若し棄てらるる者ならずば、イエス・キリストの汝らの中に在^{いま}す事を」(コリント後13・5)

プラス・マイナスはどんな具合であるか、よく自分を見てみると。「さらば誇るところは他にあらず、ただ己にあらず」

「誇るところは他にあらず」という言い方は、

「誇るところは他人から誉れを受けるといふようなことではない」

という。他人からの称賛でいい気になる。人は誉められるといい気になって、誰も悪い気持はしない。けれども、そういった他人から誉められていい気になるとするならば、それはもう虚栄心が、ある意味において、働いているわけです。毀誉褒貶^{きよほうへん}というものから超脱してしまわなくてはいいかん。エッカーマンがゲーテのことを、晩年のゲーテをして、

「あの人は一切の毀誉褒貶から超越している。実になんとも言えない落ち着きをもっている」

と言っています、そういった毀誉褒貶というようなもの、他人の讃辞といったようなものではなくて、ただ「己にあらず」という。

「誇るところは本当に誇るものならば、それは己の実力というものにあるはずだ」

と、パウロは言った。「己にある」というのは己の実力。己の実力といっても勿論それは、私されてはいませんよ。

「各自おのが荷を負うべければなり」

善にもあれ、悪にもあれ、みんな自分の荷を負って神さまの前に出る。最後の審判においては、その価値は、

「この人はこういう風に太鼓判を押してくれた。みんなの賞賛を得た人ですから大丈夫です」

と、他人の推薦状をもつて神さまの前に出ていくわけにはいかない。推薦状はどうにもならん。人間の世界ではたくさん推薦状がありますけれども、神さまの前には推薦状はどうにもならん。その人の実存が決定する。それが即ち「己の荷」ということ。プラスの荷であろうと、マイナスの荷であろうと、そいつは自分自身の実存を負って出かけていく。キリストがマタイ伝の25章で言っているとおり、

「どのように行動したか、どのように地上において歩いたか、それによつて天国に行く者と行けない者とを、山羊と羊を分かち如く、わかちのである」

と言われた、あの角度です。

6 御言を教えらるる人は教うる人と凡ての善き物を共にせよ。

即ち、

「福音を聴かせられる者は、福音を教える者に対して、すべて自分たちの持つてい



と。パウロは時々、このことを言っている。コリント前書9章11節にも、コリント後書11章9節にもある。

「**霊の饗応にあずかるのだから、共役者〔教職者、牧師・伝道師等〕を困らせないように、その生活を支持してあげなさい**」

と。しかし、パウロはその資格があったけれども、彼は自分で幕屋を作って自分で稼いで、やっかいにならなかった。けれども、受けることは勿論当然で宜しいんだと。また、教えを聴く者は感謝の意を表わさないでいたらば、それはキリストがいつか癩病人を十人潔めて、帰り来て本当にキリストに感謝した者はたった一人で、あとの九人はどこへ行つたかと言われた〔ルカ17・17〕。即ち、

「**神の恩恵を受けて、感謝の念をおこさなければ、その人はやはり本当の祝福にはあずからない**」

という角度からキリストは言われた。

問題は、教育者に対することではないので、その人が本当に神に祝されるかどうか、そういう意味においてパウロも言わんと欲しているんだろうと思います。

7 **自ら欺くな、神は侮るべき者にあらず、人の播く所は、その刈る所とならん。**

献金のことで、決して額の高をいうんじゃない。その人の心がそこに本当にこもっているかどうか、惜しんで出しているか、心からそれを出しているか、そこが問題です。それは心が潔くなければ、心が捧げられていなければ、すべてのことは祝福されませんから、問題はその人が本当に救いにあずかるかということ、ただ観念のことではない。

そういった意味で、私たちのところも献金にしたわけですが、これは今年からこういうふうにしたので、会費でないです。無教会は会費ですつとききましたけれど、荒井君が、

「**献金にしたらどうですか**」

というので、

「では、してみよう。その精神は本当はいいんだから」

ということ、こういうことにしたんですけれども。これはみな真心でやっていただきたい。私は本当そうです。私もそのことは、伝道のために使うのであって、生活のために使うんじゃない。

● **善をなすことが楽しみ**

8 **己が肉のために播く者は肉によりて滅亡を刈とり、御霊のために播く者は御霊によりて永遠の生命を刈とりとらん。**

「己が肉のために」という、この「ために」という言葉は、訳はこれでもいいけれども、ギリシヤ語の「エイス」「中へ」という言葉で、

「**己が肉の中へ**」



己が肉という土地の中へ、そういった^{はたけ}畠の中へ、といったような意味で、「その中へ」という気持は勿論、目的的な気持をもっていますから、「ために」と訳したっていいけれども、新しい口語訳はどうなっていますかね。

「即ち、自分の肉に播く者は肉から滅亡^{くさ}を刈りとり、霊に播く者は霊から永遠の生命を刈りとる。」

「肉に」となっていますが、あまりハッキリしませんけれども、大体それでいいです。

「肉の中へ播く者は肉から

「肉によりて」というより、「から」です。

肉から滅亡^{くさ}、腐れというものを刈りとり、御霊の中へ播く者は御霊から永遠の生命を刈りとるのである」

と。「肉」というのは勿論、この世的な一切のものを肉といいます。どんなにそれが善きものであっても肉です。それは即ち自己を目的としているからで、神を目的としていないものはすべて肉です。この世と自己とを求めて、そういったところに播いている者は、結局滅んでいく。文化がどんなに立派な文化でも、神の栄光を現しているような意味における文化でなければ、文化は滅んでいく。20世紀の文化は極めて危ない。原爆、水爆、軍縮なんてことをめぐって一生懸命で、危ないものだから、そこになんとかブレーキをかけようとしているけれども、ブレーキをかけながら、片一方でまた秘かにブレーキを解く、爆発させるような工作をしていますから、まことに困ったものです。

すべての問題の根本は、掘り下げてみると、突き当たってみると、みんな罪という根っこにやってくる。人間の営むすべての問題もすべて結局、宗教の問題にくる。「宗教」という言葉を、何か特殊な余計なもののようにみんな感じますけれども、そうではない。人間の存在の一番根本問題^{みたま}、と言えがいいので、宗教なんて言わなくなっちゃいい。

「御霊のために播く者は、御霊へと播く者は、御霊から、神の霊から、永遠^{とこしえ}の生命^{いのち}を刈りとる」

これは当然、永遠の生命が結果してくるわけです。結果が目的ではない。結果は自然に出てくる。滅亡というものは自然の結果となる、この世を目的とするならば。神を目的とし、霊を目的とするならば、これは当然、永遠の生命というものがそこから実ってくる。

9 われら善をなすに倦^うまざれ、もし撓^{たゆ}まずば、時いたりて刈り取るべし。

パウロは福音を宣べ伝えながら、あとの方でいつもこういった誠めを、何か道德の教えみたいなことを言ってますが、これを道德の教えのようにとったらダメですよ。福音の世界からは、自然にこういったことが出てくる。

「われら善をなすに倦^うまざれ」
でなくて、

「われら善をなすに飽きることはない」



と、善をなすことが即ち楽しみとなる。みんな「ルスト」(Lust) 喜びになる。善をなさなかつたならば、魂が窒息してしまうし、腐ってしまうから、かえって苦しくなる。善をなすことは逆に楽しみとなる。善をなすことが苦しいならば、その人は御霊によって動いていない。善をなすことが楽しいならば、その人は御霊によって動いている。この間、ガラテヤ書5章で非常に大事なことを言いましたが、そこから出てくることです。

●第二の自然性

即ち、私たちの生まれつきの性^{さが}でなくて、私たちの生^まれつきの霊^{たましひ}というものが眠っている。また、氣息奄々^{えんえん}である。ところが、この魂の窓を開いたならば、神の霊が、キリストの霊が入ってくる。そうして、その新しい新鮮な空気を窓から入れて呼吸しているわけです、この霊が。窓を閉めているから、呼吸が苦しい、呼吸困難です。その呼吸困難から呼吸が開放される。夜、閉めきつて寝ると、だんだん苦しくなる。明け方、窓を明けると、ああ素晴らしい、いい空気だなあと、自然と深呼吸するでしょ。あの自然の深呼吸をして、体の中がなにかすがすがしくなる。そのように霊魂^{たましひ}が開け放つて、神の世界に対して霊魂を開け放たなくては。

靈魂の扉を全開して呼吸していた人がイエス・キリストです。私たちは何度ぐらい開いているか知らないけれども、しかし、そんなことは気にすることはない。私たちもまた全開的な靈魂にならなければダメです。

「どれくらい自分は今、開いているでしょうか？」

と、そんなことを気にしていたら、いつまでたつてもダメです。どれくらいだつていいよ。罪のかさぶたで少し開き方が悪くたつて、全開していると思つていううちに全開してきます。全開的に開いたならば、これが自由の世界、靈魂が自由なんです。解放されている。

ですから、第二の自然性^{じふにのぜんぜんせい}というものが出てくる。この第二の自然性^{じふにのぜんぜんせい}というものから、神の欲^{ほつ}することが、光の世界が、善の世界が、自分の中に自然に湧いてきますから、その第二の自然性^{じふにのぜんぜんせい}が楽しみとなる。人間というものはその自然性^{ぜんぜんせい}において動くときに、本当にそれが力があるので、その自然性に何か抵抗をもった時には、必ず疲れてしまう。福音の世界というものは要するに新しい霊を呼吸して、その自由な天的法則となる世界です。だから、

9 われら善をなすに倦^うまざれ、もし撓^{たゆ}まずば、時いたりて刈り取るべし。

という、このパウロ先生の言い方はもう少し強くてもいいと思うくらいです。

「我ら善をなすに、くたびれなくなつたねえ！ どうだね、大丈夫だろ」

と言つてくれた方がよかった。私たちはそういう風に読めばいい。本当の精神はそれですから。

10 この故に機^{おり}に随^{したが}いて、凡ての人、殊^{こと}に信仰の家族に善をおこなえ。

「私は家族はありません」なんて言つたら困りますが、この「信仰の家族」という表現は、



ちよつとこの日本語の訳があまりよくないので、「信仰の間柄」で結構です。「この故に機に随いて」というのは、

「機ある毎に何時でも、どの機会においても、どういう時にも、如何なる機会にも」です。すべての人、特に信仰の交わりの人に、善を――具体的に、抽象的にと、いろんな意味がありますよ――善を行いなさいと。

11 視よ、われ手ずから如何に大なる文字にて汝らに書き贈るかを。

もうこれでこの手紙が10節までで一応終ったんですけれども、今最後に結びを言うと、この「結び」が大切な結びで全ガラテヤ書をつかまえているような結びです。

「手づから如何に大なる文字にて」の「手づから」とは、パウロは書簡を書く時に、普通は書かないで、口述している。傍の人が誰か書いている。口で言つてそれを書いている。ところが、このガラテヤ書は自分でもつて書いた。大きな文字で。「大きな文字」というのは、文字が大きい、本当に大きな文字という意味と、それから大きな手紙。文字というのは「グラマトス」という字で、「手紙」という意味にもなりまして、その「大きな」という意味は「長い」意味か、内容の「充実した」意味か、いろいろ学者は言いますが、どの意味もあるでしょう。何もパウロはそんなことを分析して書いていやしいと思う、「大なる文字にて」という時には。言葉というものは説明したら、ほかの意味が抜けてしまうんです。説明しないで、その意味がぐつと掴めるわけです。

「汝らに書き贈るかを」、書き贈ったかを。「アオリスト」で書いてありますが。書を贈つて、そして今、お前たちがそれを受けとつて、という現在完了の意味――ギリシヤ語は現在完了形ではないですよ――けれども、そういった気持でしょうね。

● 天的法則によつて律法を満たす

12 凡そ肉において美しき外観をなさんと欲する者は、汝らに割礼を強う。

俗に、「いい顔をする」という日本語で、「いい顔をしようと思う者は」という意味です。

「肉において美しき外観をなさんと欲する者は」

「肉において」というのは、人間のいわゆる誠律、律法の世界、ユダヤ的な「すべしすべからず」の世界において、ということ。

「その世界でいい顔をしようと思ふ者は汝らに割礼を強いる」

即ち、ユダヤ人は割礼によつて、聖別されて神の民になったという徴をする。そういった外側の徴でもつて、いいと思つている。ちょうど今でいえば、

「教会で洗礼を受けたから自分はクリスチャンである」

と、ただ思い込んでいるのなら、それはちよつとおかしい。それは「洗礼」というものが形式になつてしまう。それで割礼を強いるわけです。

これ唯キリストの十字架の故によりて責められざらん為のみ。



「十字架の故によりて」というのは、十字架をとにかく説いている。

「キリストの十字架が罪を贖った」

ということを説いていて、

「十字架だけだ」

と言うと、

「割礼がないからあれはどうも本ものでない」

と言って、いわゆるユダヤ教のクリスチャンが責める。だから、

「十字架だけでは具合がわるいから、それに割礼を、洗礼をひとつ加えておこう、

そうすれば無難だから」

と、こういうわけです。「福音＋律法」というわけだ。「福音＋律法」で無難のようにしているのがいわゆるエルサレム本山の正統派の信仰だが、パウロは

「その律法は要らん」

と言った。キリストは律法を排除せんために――「排除せん」というのはいつペン「アウフヘーベン」「止揚」^{しやう}するために、律法をいつペン捨てるために、律法に囚われないで自由の世界に本当に入れるために――キリストは来たんです。そして、天的法則によって律法を根底から満たしてしまう。

律法に執して「すべしすべからず」を人間がどんなにやったって、人間は「すべしすべからず」で生きられない。これは私たちが正直、律法の世界で落第しているからよく分っていますよ。日本というのは、律法で落第したから、おかしいことになってしまった。本当の福音をいれなかった。「すべしすべからず」が遂に偽善になってしまふ、形式になってしまふ。そこで、どうにもならん、行き詰まってしまふ。

魂は本来、永遠の生命であるところの、本当の義であるところの、本当の愛であるところの、神と連なるまでは実はどうにもならんということは、事実が証明した。それなのにまだ、「すべしすべからず」という小学に、

「小さな学の下に何故お前たちはまた戻ろうとするか」

と、一生懸命で言っているのがこのガラテヤ書でしょうが。ですから、せつかくキリストの十字架が私たちを完全に解放して、

「もうお前たちは何も心配要らん。罪から解放されたんだ。だから、この生命を受けなさい」

というのがこの世界なんです。

「自分でもって酸素吸入なんかしたってダメだよ。自分で空気を製造したってダメだ。窓を開いて、無限の空気を入れたら、もつと楽に生きるじゃないか」というのが福音の世界ですから。

「本当の愛である神と連なるということを実証が証明した。キリストの十字架が完



全に罪から解放したのだから、これを受けなさい」
と。これが福音の世界です。

「割礼を受けた者は律法全体を全うしなければならない」

ということが前に書いてあった。即ち、割礼という一つの宗教的儀式を守ること自身はなにも悪くはないけれども、それならば何故、モーセ律法全体を守らないかと。それなら結構な話だが、それはやってないじゃないか。そして、それは実はできないんだよと。

¹³そは割礼をうくる者すら自ら律法を守らず、
モーセの律法を守っていない。

而も汝らに割礼をうけしめんと欲するは、汝らの肉につきて誇らんが為なり。

「自分は割礼を受けた。こういう宗教的な勤行^{ごんぎょう}をやっている。十誡はこのとおり守っています」

とか言つて、外側から守っていることをもつて誇るようなのは、これは即ち「肉に誇る」ということです。

●十字架のほかに誇る所あらざれ

¹⁴されど我には、我らの主イエス・キリストの十字架のほかに誇る所あらざれ。
之によりて

即ち十字架によつて、

世は我に対して十字架につけられたり、我が世に対するも亦然り。¹⁵それ割礼を受くるも受けぬも、共に数うるに足らず、

今でいうと、洗礼を受けるも受けないも、それは数えるに足らず、

ただ貴きは新^{あらた}に造らるる事なり。

この二節は極めて大事な二節です。

「されど我には、我らの主イエス・キリストの十字架のほかに誇る所あらざれ」
これはコリント前書1章18節にもありましたね。

「¹⁸それ十字架の言は亡^{ことば}ぶる者には愚^{おろか}なれど、救わるる我らには神の能力^{ちから}なり。」（コリント前1・18）

それから1章23節、

「²³されど我らは十字架に釘^つけられ給いしキリストを宣伝^{のべつた}う。これはユダヤ人に蹟物^{つまずき}となり、異邦人に愚^{おろか}となれど、²⁴召されたる者にはユダヤ人にもギリシヤ人にも、神の能力^{ちから}また神の智慧たるキリストなり。」（コリント前1・23〜24）

それから2章2節、

「²イエス・キリスト及びその十字架に釘^つけられ給いし事のほかは、汝らの中にありて何をも知るまじと心を定めたればなり。」（コリント前2・2）



「イエス・キリスト及び」ではなく、「イエス・キリスト即ち」です。
「イエス・キリスト即ち十字架に釘けられたる者のほか、汝らの中にありて何を
も知るまじと心を定めたのである」
という。

「パウロの福音は十字架中心である」

というのは、言うまでもない。教会堂の上には十字架が立っている。また、教会の壇の所には十字架がある。ここの部屋には十字架はないけれども。

また、ロマ書の特に3章と6章のところをみれば、この十字架のことは徹底的に書いてある。ピリピ書にもあります。コロサイ書にもあります。いたるところにパウロの書簡には必ず出てきます。

「之によりて世は我に対して十字架につけられたり、我が世に対するも亦然り」

この「世」と「我」というものは、パウロはもうこの関係は十字架において関係づけられている。ルターが、

「この『世』とあるのは、不信仰なる悪しき人を意味するのではない。この世の最も善き、最も潔き、最も賢き人のことを意味しているのである」

なんてことを、『ガラテヤ書註解』の中で言っています。勿論、不信仰の悪しき世も入っているのだけれども、ルターが特にこの世の善き者も、潔き者も、賢き者も、みんなこれは世だ。即ち、世を求め自己を求め、神を求めない一切のものは、どんなにそれが立派なものであっても、それは罪である。

「およそ信仰から出発していないものは全て罪である」

とは、パウロがロマ書14章で言っている。その通りでして、この「世」というのは、どんなにそれが立派なものであろうと、またダメなものであろうと、全部これをひっくるめて世という。あるいは、それを肉という。

だから、十字架が躓きなんですよ、十字架が。ギリシヤ人というのは、ギリシヤ的文化というものは、人間の生み出す様々の美しきもの、真善美は結構です。普通の世界でも真があります、善があります、美があります。パウロは別なところでは、

「おおよまこと凡そ真なること、凡そ善きことは之を貴べ」

と言っている。その点では、パウロの言葉は矛盾しているようですが、矛盾してないじゃないですか。

人間の営むものは、科学の世界、学問の世界は真。道德の世界は善。芸術の世界は美。みな結構です。それ自体、何も悪くはない。ところが、何故それが肯定されないか。それ自体は肯定して、

「凡そ善きもの、凡そ美しきもの、凡そ真なるものは貴びます。けれども、ちよつとそこには大事な根本条件が要るよ」



というんです、本当は。その根本条件とは、その真なるもの、善なるもの、美なるものが、自己を求めて咲いているか。なるほどそれは結構なんです。結構なんだけれども、それは必ず滅びるよという。

どうして、日本に本当の芸術が展開していかないだろうか。どうして、日本に力強い道徳が展開していかないだろうか。どうして、本当に素晴らしい学問が根強く展開していかないだろうか。個人個人にはなかなか素晴らしいものがあるけれども、どうして先生の弟子が、またその弟子が嗣いで、大きなものに仕上げていかないか。虚栄を求めて、自分の功名を求めているからなんです。それ自身はまことに結構なんだけれども、全体として大きくは展開していかない。そこは、ドイツ人あたりは、本当に自己を捨てて、真理を求めている。神に属するところの角度から真理を求めているから、やっぱりドイツ魂なんてのは、底力がある。その底力は自己から発してはダメなんです、上から来てなくては。上から、神から来てなくては。

即ち、このようなことを発している自分の才能というものが、天賦というものが――「天賦」という言葉がだいいち現しているのに――何故この「天」の字をいい加減にするかというんです。我々の才能を「ガーベ」(Gabe)というけれども、これは「ゲーベン」(geben 与える)から来ていて、「与えられたるもの」のことです。どこから与えられているか。神から与えられている。その「ガーベ」が即ち「アウフガーベ」(Aufgabe)「課題」となる。自分の与えられたる才能は課題となつて、生涯のそれを「レーベンス・アウフガーベ」(Lebensaufgabe 生涯の課題)として神さまの栄光のために使うわけです。

何もそれは二段構えではない。やっていけば、それが本当に魂がそのように自己のない角度になつていく。これが限りなく花咲いていくんです、真善美というものが。そのときにそれは本当に祝福されたものです。それが学問であろうと、芸術だろうと、道德の世界だろうと、何であろうと、事業であろうと、政治であろうと、経済であろうとね。

それが経済ならば、本当にそれは世の救いともなるし、大きな文化的な幸いの展開ともなる。アメリカ人あたりが、金持ちがいいことに金を使えるというのは、やっぱり彼らは何といつても、そういった福音の伝統、下積みがあるからです。そういったものが日本にはないですから、これはあなた方新しい若い人たちが、どうしてもその世界を日本に作らなくてはダメですよ。これを作らなければ、日本はいつまでたつてもダメなんです。これはハッキリ言っておきます。儒教が、仏教が花咲きましたが、最後に花咲くべきキリスト教が残っている。それを若い人がやってくれなければしょうがない。やってくれなくては、私は百年も二百年も生きますよ、生きたいと思うよ。やって下されば、私は今日、死んだつていい。



●無即無限の世界が展開

「心に太陽を持て」

という。天来の太陽の光をもつ。これは比喻ではない。本当に神の光を自分の中に宿さなくては、その相^{すがた}を。そうしたらば、なんとまあ嬉しいでしょう。嬉しくてしょうがない、楽しくて。そして、力が泉の如くに湧いてくる。これは論より証拠です。その世界に入らなくては。その世界に入ったらもう、ピアノを弾く人はピアノがのびていく。歌を歌う人は歌が伸びていく。絵を書く人は絵が伸びていきます。勉強する人はその勉強が楽しく進んでいきます。何でもそうです。だから、

「どんなに立派なもので、それ自体はダメだよ」

とルターが言ったのは正にそれです。決してルターは誇張して言っているのではない。世と我とは十字架の関係にある。我というものがどんなに立派でも、こいつが否定されなければダメである。この源泉なくして我なんかを立てたって、それはダメなんです。こっち〔我〕を否定するときには、あっち〔汝〕を肯定するんですから。

「汝の世界なり、我が世界にあらず」

と言ったならば、汝の世界が入ってくるんです。

「汝の意志、汝の聖意^{みこころ}よ、我がうちに成り給え！」

というのが入ってくる。そして、神の栄光が現れる。太陽の栄光はこの花に現れている（机の花を指して）。花は自分で咲いているのではない。これは光を受けて咲いている。

この自分というものが、キリストという十字架によって碎かれなくては。人間は自分で自分で十字架にかかれなからですから。「自己否定」なんて、そんなのは言ってみたってダメです。「大死一番」なんて言ってみたってダメです。それはちよつと瞬間的にはえらそうで、そんなこともできるかも知れないけれども、しかし、そこからは本当の生命が出てこない。それも悪くはないけれども、それは仏教的な悟りの世界かも知れないけれども、キリストの世界は、福音の世界はもつと積極的な素晴らしい本当の世界です。

私は「無」と言うけれども、ただ無というものを尊重しようと思つて無を言っているんじゃない。無となれば、無限である――有です――無限となるから、というのです。しかし、「無となればといったって、どうして無となれますか？」

と聞く人があるかも知れませんが、そんなじゃない。無は、無となっているんです。私が自分で無となれないから、キリストが、

「お前は無となれないね、ダメだね。そういうわけだから、私が十字架にかかった。お前のためにかかった」

と。私がこの十字架で無とされたんですから、そうしたらば、この十字架のあとからくるこの無限の生命、キリストの生命が私の中に入ってくる。皆さんの中に同じく入ってくる。無即無限という世界が展開を始める。



だから、「世」と「我」とは直結していない。私はこの世に対しては「ナイン!」「否!」と言う。世に対して「否!」と言う人は、本当は世を根底から展開させていくことのできる人です。ただ世を捨てて山の中へ入るのではない。世に対して否と言うことは、本当の世にしてやろうと思つて、否である。それが即ち、十字架を通して世を否定し、世は我を否定しているが、この相互否定において実は――向こうが否定したつてダメですよ――こっちが本当に世を否定したときに、世を本当に逆にその否定のどん底から肯定し上げていくんです。肯定するとは、そのまま肯定するのではない。その奥から変質変貌させながら肯定していくんです、世というものを。だから、

「天国は近づいて来た。汝らの中にあり」^{うち}

とキリストは言った。天国が内にある。何かどこか遠い所に憧^{あこが}れているのではない。「お前たちの中に」というのです。それは仏教の世界でもそうでした、

「極樂とは、娑婆^{しやば}が即ち極樂という角度にならなければウソだ」

という。西方浄土にも極樂があるかも知れないが、しかし、本当の極樂はこの娑婆の中にこそある。

「大隠は町の中にかくれる」

という。小隠は山にかくれるけれども、大なる隠者は町の中にかくれて、町を清くするものである。町を明るくするものである。お釈迦さんの本当の教えはそれでしよう。

●第二の創造

それよりももっともつと素晴らしい意味において、世を徹底的に否定するときに、世を本当にその奥底から、変えながらそれを肯定していくという、そういったものが即ち、パウロがそのあとから自然に出てきているところの、

「新たに造られることが大事である」

ということです。即ちこの、

「それ割礼を受けるも受けぬも、共に数うるに足らず」

何故、そんな小さな問題を問題としているか。もし、洗礼を受けるならば、キリストのように洗礼を受けたらいい。キリストは洗礼を受けましたよ。悔い改めの洗礼を彼はヨハネから受けた。彼は悔い改めの必要がなかったけれども、悔い改めの洗礼を受けたら、彼は御霊の洗礼を受けた。キリストは、水の洗礼が即、霊の洗礼であった。水の洗礼即ち霊の洗礼です。

皆さんがもし教会で洗礼を受けるならば、本当に御霊にあつて、自分がこの十字架にかかった、そこを瞑想して洗礼を受ければ、御霊の洗礼になる。牧師さんが水の洗礼をしているかも知れないけれども、皆さんは御霊の洗礼になる。それで、かえって牧師さんの方が驚いてしまう。



「牧師さんが御霊の人でなくして、何故、教会を牧するか、本当のものを与えないで、何故、教会を牧するか」

と、パウロも天上で嘆いているかも知れない。だから、グラハム〔註…ビリー・グラハム Billy Graham (1918～2018) はアメリカの最も著名な福音伝道師、20世紀中頃のリバイバル運動、聖霊運動の主力となった一人。1956年2月に立教大学で教職者向けのセミナー開催〕がやって来て、牧師さんたち教育者三千人が立教のタッカーホールとかいうホールに集まった時に、

「あなた方は聖霊を受けなさい!」

と。牧師さんたちが「聖霊を受けなさい」なんて言われたらもうこれは面目なしですよ。

「それ割礼を受くるも受けぬも共に数うるに足らず、ただ貴きは新たに造らるる事である」

即ち、十字架に私たちは葬られて既に死せるものである。

「まだ私は本当に死んでません」

なんてことを気にすることは無い。既に死んである。自己というものはすつ飛ばされてしまった。自己というものは根底的にすつ飛ばされて、相変わらずダメですが、そんなダメなものは見ている必要がない。そして、自分の中にキリストの生命が、

「我は復活の生命、甦りである、生命である。我を食らえ、我を飲め」

と言ったこのキリストに自分を投ずるならば――これは祈りの世界ですよ、皆さん――この永遠の生命が来れば、もうそれは新しき創造、第二の創造です。第二の創造が始まっている。「新たに生れずば」という、「新たに生れる」というのはそこから始まっている。

この間、清瀬でお話したように、

「幼児の如き魂おたまになつて、これを受けとりなさい」

と。分裂してはダメだ。全的な意味でもって、このキリストの生命を受けとる。新創造です。これはいうまでもなく、キリストの御霊が、霊が私たちの中に、祈りの世界で本当に自分が明け渡されて、十字架において瞑想して本当に信をもって受けとるときに、これは必ず来ることです、それが観念でなかったなら。

そして、大事なことは、その創造の世界、御霊の世界が瞬間的では仕様が無い。内住して来なくては。御霊の世界が内住するとは、私たちは、呼吸が、即ち靈魂の呼吸が常住的にならなければダメなんです。何をしていてもそこに靈魂の呼吸が、キリストの霊の世界を神の本当の現実の世界で呼吸しているような靈魂になってきたら、とにかく、私はそのことが少しずつ本ものになってきたら、正直、楽になった。そして、聖書が本当に読めてきたんです。それまでは、読めても、それは字面づらは読めていても本当に読めていなかった。

「私はもう読めた」

なんて言っているんじゃないですよ、聖書は限りなく読まなければダメなんです、限りなく。

「これでいい」



なんてことは一つもない。

● believe・live・love

英語で「信仰」という字は《believe》という。《lieve》というのは「任せる」という字ですよ。信仰というのは。これは元来《lyfan》という字で、これは面白い言葉で「任せる」、ドイツ語でいつて《lassen》ですが、《believe》の《lieve》は《live》「生きる」に通じる。それはまた《love》「愛する」に通ずる。だから《believe》「信ずる」と《live》「生きる」と《love》「愛する」というのは、語源的にいつても相通じている。面白い言葉です。

即ち、自分を神さまにすっかりゆだね任せて、花が太陽の光に、空気に一切を任せて、そして開いて——これは太陽の方に向かって開いて、みんな太陽の方に向かって開く。下を向いてない——みな陽の方を向いている。向日性といえます。人間はこの向日性が変わらなければダメです。植物から学ばなくては。

「植物は向日性だ、それに決まっている」

なんていい気になっているからいかん、私たちも向日性にならなくては。この向日性式にひまわりみたいに——ひまわり荘というのが小諸にあるけれども——日に向かってまともになっている。それが即ち「まかせる」ということ。そうしたならば、生命《life》が入ってくる。これはどういう生命かというと、愛の生命です。キリストの生命は愛の生命です。だから、

「キリストの律法を全うせよ」

とは、そのキリストの愛の律法を、愛の生命を受けなさい、愛の霊を受けなさいということ。そうすれば、その法則が自然に内側から全うされていきます。

私たちは相変わらず躓いたり、転んだり、滑ったり、倒れたりしますよ。けれども必ず起き上がる。だまるさんが「七転八起」というけれど——あそこに達磨さんがあるから言いますが——七転八起どころじゃなく、起き上がって、そうして、起き上がるばかりじゃない。我々は前進していく。そういつたのが即ち、このキリストの律法、キリストの天則に——律法なんていうからいかん、天則です——キリストの天則にのっかる、

「天則に乗っかりなさい」

ということ。天則の中に乗ってしまつたならば、動いていきます。だから、例えば、

「御霊の人は柔和なる心もて正すべし」

とあれば、

「ああ、私はどうも柔和でないから困るな」

なんて、そんなことを思わなくていいですよ。このキリストの愛は非常に力強いから。例えば、ある人が躓いたらば——そんなことをとやかく問題にするようなケチな魂でないから、本当の御霊の世界は——それはこちらの本当に力強い愛でもって覆ってしまう。その



力強い愛というものは、ある時には柔らかくも出るだろうし、ある時にはものすごく力強くも出るだろうし、とにかく本来はものすごく力強いものがあれば、その出方は自由自在なんです。生命が真物ほんものであれば、ある時は小川の如くせせらぎ、泉の如くチヨロチヨロとしているかと思えば、大海の如く、怒濤の如くなったり――水というものはそういういた具合に千変万化する――私たちの中に本当のキリストの愛、生命が来ているならば、その現れ方はその時その時に自由な現れ方をするんです。それは即ちパウロが、

「一切の秘訣を得たり」

と言っている世界なのでして、その意味において、新たに作られる。なるほど、十字架というのは、「十字架」という言葉にすると何かつらいような感じがするけれど、ちつともそうじゃない。本当に「負つていく」ということは、人間はそこに何か喜び楽しみ、力というものが、光というものが、ともなつてくることでなければ、出来るもんじやない。そして、本当の世界は必ず伴ってくるんです。だから、パウロがもろもろの艱難に出つくわしながら、なお喜んでいたというのは、これは本ものが上から来ているからです。

●キリストが罪を引き受けた

「此の法のりに循したがいて」

というのは「生命の御霊の法」のこと。それはロマ書の8章2節にあるでしょ、

「²キリスト・イエスに在る生命いのちの御霊みたまの法のりは、

「生命なる御霊の法は」ということですよ。

「なんじを罪と死との法より解放ときはなしたればなり」(ロマ8・2)

と。キリストの生命は、皆さん、

「キリストは今も生きている。今も本当に霊において生きている」

ということが本当に受けとれていなければダメですよ。十字架を突破して彼が天界に昇天してしまった。その天界において今もなお生きるキリストは、我らに霊をもつて自由自在に皆さんに100%に働きかけている。そのキリストを受けとらなければ、本当の信仰じゃない。

「イエスが十字架で私たちの罪を贖あがなつて復活して昇天した」

という事柄を、昔の物語や昔ばなしのように、

「そうかね、まあ仕方がない、信じておこう」

なんて、それじゃダメです。それは本当は受けとつていない。それは命題としてただ信じ込んでいるだけのなし。それはサタンでも信じるんです、そういうことは。私たちが信ずることと、サタンがそれを受けとつていうことと、どこが違うかというのと、

「信ずるとは、私たちがその世界とのつらなりの中にある」

ということと。絶対にそうです。聖書の世界をその連なりの中にあるというところがないものだから、何時までたつても、キリスト教界のいわゆる信仰というものは力がない



んです。

そういう連なりの中に私たちはある。この全世界の空気は私たちを包んでいる。私の中に入っている。毎日瞬間毎に、私の血を新しくきれいにしている。その通り、神の生命は、キリストの生命は私たちの靈魂を、時々刻々にそのように展開また展開、創造また創造していく。私の生きているのはそれで生きているんだから、

「私の生命はこれである」

ということが本当に腸の底から、

「そうです！」

とすることが出来るまでは、力は来ない。それはどこから来るか。どうしたってその関門は十字架なんです。それを受けとれないということがそもそも「罪」なんです。しかし、

「それは心配いらぬ。その受けとれない世界をもう私はみんな受けとって開放してしまっているから。何を考えているか、『それはどうもわかりません』なんてことを何考えているか、私はちゃんと聞いているのに。もうお前はそこに居るのに、何故居ないと思っているか」

と、キリストはこう仰っているわけです。ちつとも私たちの罪を責めているんじゃないですよ、キリストは。皆さん、罪を責めているんじゃないで、罪を引き受けちゃっているんです、キリストは。「罪、罪」とプロテスタントは言います。私たちも罪と言います。けれども、「罪を、罪を」と、いくら問題としても始まらない。これはもうキリストが引き受けてしまつて下さったんです。下さったんですから、そこが分かつてこなくては。

そのように、神と直結できない、人間の脱索性というものを、

「それと直結する世界にもうお前は入っているじゃないか、私が入れたじゃないか」

「あ、そうでしたか」

と言つて呼吸してごらん下さい。楽になるから。この霊が本当の祈りの世界に入る。

●聖名のため受けし傷跡持たずして

16 此の法に循のりしたがいて歩む凡ての者の上に、神のイスラエルの上に、

「神のイスラエル」というのは、「神の民」ということです。

平安と憐憫あわれみとあれ。

17 今よりのち誰も我を煩わすな、我はイエスの印を身に佩おびたるなり。

今日は「イエスの印」という題ですけれども。

「我はイエスの印を身に佩おびたるなり」

ルターはこの「印」というのは、

「パウロが身につけたところの傷と苦難とを意味している」

と註に言っています。さもありなん。そうでしょう。



「^{みな}聖名のため受けし傷跡持たずして御前^{みまえ}に出づる恥知るやきみ」
という、我々のある先輩の人の歌がある。

「聖名のために受けたところの傷跡なくして、神の御前に出づるその恥を知っているかきみよ」

という。神を信じ、キリストを受けとった者は、何らかみな傷を負って天国に行く。

「傷あとながないようなのは天国に行けないんだ」

というわけです。まあそれは正直そうです。

一体、如何なる本ものが、この地上において苦難を経ないで、本ものが現れるか。芸術家の生涯をみてもみんなそうです。本当のものを生み出している人たちはみな、苦難を通っている。発明家もそうです。さんざん人から馬鹿にされて、「何をやっているか」なんて言われながら、自分の身体をすりへらし、財産をすっかり投じ、借金までもして、そうして、最後にその発明発見に到達する。そういう時はもう命が終るような時さ。また、本当の真理を言っても、誰も生前にはその真理を認めないで、百年も経ってからやと、そいつが現れてきたなんてのは、キエルケゴール「1813～1855」なんてのもその一人です。

「今輝くものはただ瞬間のためにあるものである。本当のものは、今は認められな

くても、後の世にそれが新たに現れてくる」

というゲーテの言葉もあります。私たちのこの原始福音がそうです。私は正直、無教会でちよつと除け者にされている。無教会に何か催しがあっても、昔は私を必ずメンバーに入れたけれども、この頃は入れない。これ、聖名のために私は除け者にされている。結構なんです。私は^{ほんもの}真物になつたらば、人が異端視扱います。

パウロが然り、イエス・キリストがその異端の最大なるもの。イエス・キリストは旧約聖書のユダヤ教の正統派からさんざんに白眼視されて、とうとう十字架にかけられた。キリストは異端の最大です。本当の道を歩いてきた人はみんなそうです。マルチン・ルター然り。まあ、私なんかこんな小さな存在はどうでもいいですよ。しかしながらとにかく、私たちはこの本ものになつてきたらば、異端視され、すこし除け者にされた。いいです。

ところが、これはキリストが、またパウロが、ヨハネが、天界から、

「お前たち、心配要らん、小さき群よ、汝らに御国を与えるは之、父の意なり^{こころ}」

と、ルカ伝の12章かどこかでキリストが言っている。この問題は、キリスト・イエスと本当に連らなりをもって、自分がその自分の立場でなくて、福音の中に限りなく入っていくこと。その福音の中に限りなく入っていく事態は、何処において一体わかるのか。

それはここにパウロが言っているところの「イエスの印^{しるし}」です。この印は、そういった苦難や傷であるかも知れない。それもいいです。それも印です。けれども、印中の印というの——この字は「ステイグマ」という字です。あのアッシジのフランシスが深く十字架を瞑想すれば、手のひらから血が流れてくる。そういったような凄い現実に行く。それ



も一つの「ステイグマ」「印」です——けれども、私たちの印は目に見えないところの十字架が印でして、これこそが印中の印なんです。キリストの十字架が印中のしるしです。

●十字架という徴

さっきのルターの註に、ルターは何故、十字架と言ってくれなかったとさえ思う。苦難や傷あと、それは結局、十字架がもたらすところの一つの現れなので、一番深い意味においては、私たちが即ち十字架されているということ、十字架されたる存在であるということです。

「言い逆らいを受くる徴とならん」

と言ったでしょ。イエスが誕生した時に、シメオンがイエスを抱いて、

「この子は言い逆らいを受くる徴とならん」

と。去年のクリスマスに、皆さん、一緒に学んだでしょ、この「言い逆らいを受くる徴」(「曠野の愛」誌26号1956年秋冬季合併号に掲載、「言い逆らいの徴」東京療養所東講堂にて)を。私たちも言い逆らいを受くる徴となったならば、これは本当に嬉しい。ユダヤ人には躓きであり、ギリシヤ人には愚かとされるところの徴。私たちは、クリスチャンには躓きとされ、文化人には馬鹿者とされる。それが即ち私たちの十字架という徴なんです。ところが、本当の文化を支えている者は誰か。本当の福音を展開していく者は誰か。知らんです。本当の徴を受けている人たちがこの福音の世界も、文化の世界も、本当の意味において展開していくところの根源動力となる。真に捨てられた石は「隅の首石すみのおいし」となる。そのような捨てられたる石は隅の首石となるところの徴、これはイエス・キリストが徴の最大なるものです。彼は十字架をもつてこの世界を負っている。いつか私が図表で書いたでしょ。

三角錐体(図では三角形)で現わすならば、十字架はこの現世(下の三角形)というものを、この悪の幕屋というものに十字架が大黒柱になって、この世界はとにかく保っている。キリストの十字架があるからもっている。これ(上の三角形)は天界、パラダイスは、こっち側からはこの十字架という狭き門を通らなければこのパラダイスにはのぼって行けない。ここを通らなければ。そして、この十字架の上からは燦々として聖霊の光が実は、闇の世を負っているんです。神の栄光がこの全地に満ちている。ただ見えない。霊盲だから見えない。

サタンが君臨していたって、それよりももっと素晴らしく、キリストはこれを負っている。その十字架という印が、即ち私たちの中に至聖所が開かれた。私たちの至聖所が開かれた。その至聖所はゴルゴタです。ゴルゴタという至聖所が私たちの中に開かれている。ゴルゴタという至聖所が開かれて、土にて作られたる幕屋は必要なかった。天の幕屋が即ち私たちの中に投影されて、神の国はこの中にある。神の宮がこの中にある。皆さんと私たちの間にある。また、一人ひとりの中に、この神殿がある。我々が即ち神殿ですから、神殿の



存在です。

「汝らは神の^{はたけ}畠である、神の宮である、聖霊の宮である」

と言ったのは、この十字架によって至聖所が、罪から解放された聖き世界がそこに展開しているからです。キリストの生命は来る。聖霊は来るんです。これが、

「我はイエスの印を身に佩^おぶ」

ということ。「佩ぶる」という字はもつと強い言葉ですが、「負う」という字で、「身に負っている、荷物のように負っている」「バスタゾー」という字です。我らはイエスの印を、十字架という印を身に負っている。女の人が胸のところによく十字架をつけたり、カトリックの尼さんが大きな十字架をかけていますが、それはかけてもかけなくてもいい。我々は胸の中に本当に――ブロークンハート (broken heart) 々――そのハートはブレイク [break 破碎] されているか。

「この世のハートはブレイクされて、キリストの心臓が新しく鼓動しているか」

という話です。キリストの心臓が新しく鼓動しているためには、この十字架で突破されていなければダメですよ。そうしたらば、この聖き、熱き、キリストの心臓の愛の血というのは、一切を生かしていく。これは天国の源泉だからです。

「わが血を飲め、わが肉を食らえ」

と言った意味はそこにある。この生命はとにかく、

「何か知らんが、私は生きてきました。何だか知らんが、生命がやってきました」

となったなら、それはその世界が呼吸され始めたんです。この十字架という印を身に、キリストと偕に、

「己が十字架を負いて我に従え」

と。けれども、その「十字架を負う」ということは何か苦しいことじゃないですよ。ものすごい力でその十字架を負える。なんとなれば、キリストの生命が来ているから十字架を負えるんです。キリストは何故、十字架を負えたんですか。神さまの生命が来ているからです。神さまの聖旨^{みことば}がそこに展開していたから、キリストはそこに展開していたから、キリストは十字架が負えた。彼は自分が英雄的な、何か宗教的天才が十字架を負ったなんて、そんなことではない。

「自分は何もできません、何も言えません」

とキリスト自らヨハネ伝でも言っただけの通りです。

「貴神^{なんじ}の御意^{みこころ}、我が中^{うち}において成れ」

という、この生命をパウロが至るところで、

「福音は言葉じゃないよ、力だよ、生命だよ」

と言っている。ヨハネもそうです。そうだったわけで、

「我はイエスの印を身に佩^おびたり」



と。それで皆さん、何か事に当たって、すぐ瞑想されるでしょ。

「自分は、本当にキリストの十字架という印を持っているか、全存在が即ち十字架となっているか」

と。パウロは、十字架のための十字架を言っているのではない。どこまでも、イエスの十字架即復活のイエスのことを言っている。だから、

¹⁸ 兄弟よ、願わくは我らの主イエス・キリストの恩恵、

キリストの生命の恩恵が、

なんじらの霊とともに在らんことを、アアメン。

こう言って、このガラテヤ書は終わりました。

●信とは根源の行為

この間、かつてこの幕屋にも時々あらわれて、今、戻川で伝道している久住君の手紙がここにありますから読みます。

「先週の日曜日に殆ど盲の老婆が五回連続して教会に教会というのは自分の幕屋のことです。

出席しているうちに突然、目が開き、大声をあげて

『見えます！ 見えます！ あの絵が、この人が！』

と叫び出したので、びっくりしてしまいました。いよいよ日増しに視力は回復して、聖業は完全に現れて、実証されました。目の開いた者も、祈った者も、共に泣きだしてしまいました。それから、腎臓結石で非常にひどい人が四年間どうも教会で信仰が得られなかったが、今ここでもってハッキリつかまえて、その腎臓結石の具合もよくなっていました。」

と、原始福音の証を私のところに言ってきています。その手紙の一節です。

また、ここに居られる高木君も癌の人を救^{たす}けたり、いろいろしておられます。我々の間でそういった福音の――なにも病の癒しのことを言っているではないけれども――キリストの生命が本ものとなって来るところには、今まで人が思いもよらないことが生じてくる。私自身、この間も、母の追悼生涯のところ、私は書いたんですが、

「私は誠に、ある意味において、不信であった。即ち母が35年間、盲^{もう}していた。しかし、私がかしこの最初の頃から、今の信の世界にいたならば、あるいは母はその盲の世界から解放されたかも知れない。そのことを思うときに、私は確かに一面において不信である。それは従来の無教会の信仰ではそんなことは思いもよらなかったから。けれども、それはイザヤ書35章に預言され、キリストが実証されている世界、使徒たちがまた実証してきた世界で、またそここの偉大な証者たちが実証してきた世界です。」

と。神の生命というものは――人間の生命は勿論、相対的な生命で、いつぺんは滅びてい



きますけれども――滅びないところの驚くべき生命が内側から展開していく。それが時々、現象する。それは突破して、この50年か100年の生涯を、肉体を突き破って、永遠の生命というものは展開し、皆さんの中にこの永遠の生命が今、展開しつつある。その意味において、この福音の世界は、こと病に当たれば、病に対しての力を持ち、こと芸術に当たれば、芸術に対するとところの力を持ち、学問に対すれば、事業に対すれば、何においても、今まで自分で思わざるような展開を始めるんです。その意味において、諸々の現象、事柄を通して神の栄光が現れていく。たとえ、外側がなかなか現れなくても、内側において現れつつある。それを本当に受けとっていかなくてはいけない――「いけない」ではない――もうそうなつて来たらば、皆さん、正直、生命が何か違ってくる。

「これは本ものです。これは神の栄光の現れです、キリストの生命は」

と。神の栄光を最大限に現したのがナザレのイエス・キリストですから。その点で福音書を皆さん、よく読んでくれなくては困る。イエスという者において、

「我を見し者は父を見しなり」

と言われたイエスがどれほど神の栄光を現していたか。その言葉が、業が、全実存が、その十字架、復活、昇天が、どれほど素晴らしい神の生命の事態であるか。

「なるほど、普通言っている信仰なんてものは、およそ眠っていたなあ」

ということがわかる。また新たに本当にキリストの印を身に佩びてきたらば、今度は十字架の印は同時に復活の印となつて、皆さんの中に入つて行くと思う。

パウロは、信仰の世界と言った。ヤコブは、行為の世界と言う。これが非常に面白い。信仰と行為が、信即行の世界という――ルターはヤコブ書のことを「藁の書簡」と言ったけれども、これはちよつとルターは言い過ぎてしまった――ヤコブ書は、実はガラテヤ書と相呼応するところの姉妹篇です。そのヤコブ書は行為を言っているが、これはただの行為ではない、根源行為です。信とは根源の行為であるということを、私たちがヤコブ書でむしろ学びたいと思う。ガラテヤ書とヤコブ書とは一つであるなんて、本当に心の底から、今までのかつての無教会ではおよそ叫ばれなかったでしょう。けれども、この原始福音の世界に来れば、そうなんです。

なおこの印のことについては、旧約聖書からいろいろ引用しようと思ったけれども、どこかへ行っちゃいましたから、まあ止めます。それでは、今日はここまでにして終わります。

